The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

シャンソンにおける笑い
「フランス新音楽シーン」より

戸板律子

1．はじめに

日本人が抱く「シャンソン」のイメージと「笑い」とは結びつきにくいようであるが、実際は全く逆で、シャンソンつまりフランス語で歌われるポピュラーソングは笑いに満ちている。レ・フレール・ジャック Les Frères Jacquesやシャンソン・プリュス・ビフリュオレChanson Plus Bifluoréeのように、コミカルなレパートリーを中心に据えるグループが伝統的に存在するだけでなく[i]、彼等のような特定の「ユーモア系」アーティスト以外の「普通の」シャンソンやアイドルポップスに至るまで、笑いは広く存在しているのである[ii]。本稿ではシャンソンにおける笑いの存在と形を、現在の音楽シーンの中から取り出してその例証としたい。

ところでここ10年来のシャンソン界は、アングロサクソンの音楽に押されて一時衰えた勢いを盛り返し、マスコミからNouvelle Scène Française（フランス新音楽シーン）などと呼ばれる活況を呈している[iii]。自作の楽曲を自ら演奏し、テレビのスタジオより生の舞台を中心に活動するこの新しい世代のアーティストたちは、英語のロックやポップスに影響を受けた音楽性を大切にしながらも、フランス語の歌詞を通して、つまり言葉で何かを表現することを重視している。本稿で取り上げるのは、それらのアーティストの中の７名／組である。

＜表記について＞

- 楽曲タイトルは戸板訳を『　』で示し、末尾にリストを掲載する。日本未紹介のものが殆どだが、中には既存の邦題と食い違うものがあるかもしれない。
- 固有名は、カナ表記の後に初出箇所で原綴を掲げる。
- 歌詞の引用は、紙幅の制限から和訳のみを《　》で示すか、必要に応じて原詞を本文中に記し、直後に和訳を（　）で添える。
- フランス語の読みは[　]で示す。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

2.1 リンダ・ルメイ Lynda Lemay[iv]

シャンソンの中に、恋愛以外にいかに多くのテーマが存在し、その中にいかに笑いが遍在しているかを示すのに、リンダ・ルメイは最も好適な例に属するだろう。ギターを弾きながら、多くは一人称語りで歌い聞かせるのは、自殺願望、母親の安楽死、全身介護に頼っての生、といった深刻なテーマから[v]美容院や歯医者での悲惨な体験、ダイエット・エクササイズでの奮闘と挫折、来客なんてまっぴらという本音まで[vi]、実に多岐にわたる。恋愛という最も平凡なテーマ一つとってみても、初恋の相手との再会や、愛する人の子どもを望む気持ちを歌った微笑ましいものもあれば、パートナーからの暴力という過酷なテーマもあり、またベッドの中の不満を婉曲表現を駆使してユーモラスに語ったものもある[vii]。このようにしてルメイのライヴ会場は、しみじみした曲に聴き入っていたかと思うと、一転して大爆笑に包まれるのである。

ルメイの歌の引き起こす笑いは、単にテーマや内容の面白さだけではなく、そのテクスト・音楽両面での語り口の上手さによる。それがよく現れているのが『緑色の靴』である。歌い出しは落ち着いた感じのメロディにのせて、ちょっぴり臆病な「私」が付き合って２か月目に「あなた」の部屋をついに訪ねるまでが語られる。歌詞といい曲といい、ここまではごく普通のラブソングである。ところがここで曲調ががらりと変わり、それに合わせて事態も一変する。独り暮らしのはずの男のクローゼットの中に《私は見た…緑色の靴　緑のハイヒール》。曲は《緑色の靴》の部分でそれまでの変ロ長調から変ロ短調に転調、この短いフレーズを挟んで変ニ長調に変わる。冒頭のメロディより３度上昇し、しかもテンポも♩＝60から♩＝120となるから[viii]、ハイテンションで躍動感のあるメロディである。「私」はそのハイヒールの《靴底をじっと見据え》る。原詞 J'les ai r'gardés droit dans les semellesのsemelles＝底をyeux＝目に置き換えれば「相手の目を見据える」という決まった言い回しになるので、忌わしい靴と「私」とがあたかも睨めっこをしているような図が浮かんでくる。

２番は「あなた」の口説きぶりの見事さを最初のメロディにのせて語ってから、再び同様に転調してハイヒールとの対決に移る。まずサイズを確認、《よかった、あなたのじゃないわ》、次に《ゴム手袋をはめて》それをつまみ上げ、ベッドで待つ「あなた」の元へ。それを見て《白いベッドの上のカメレオンのよう》になっている相手に持ち主を訪ねると、返ってきた答えは《信じられない、私の予想とぴったり同じ。全然覚えがない、僕の方こそびっくりしてる、絶対に、誓って、そんなものは生まれて初めて見た》。

それを受けてアップテンポの曲にのせた皮肉の攻撃が続く。勝手に生えてくるなんてキノコの一種かしら、あなたの家ってじめじめしてるんだ。もしかして聖霊から授かったのかも、ベッドの下にブラ授かる人だってあるし、等々。

最後は再び冒頭のメロディに戻り、同じように緑のヒールを見つけてしまった女の

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

子たちへのメッセージで締めくくる。そんなものさっさとゴム手袋はめてゴミ箱に捨てなさい。真相なんて知らないままで、目を閉じて天国へ行きなさい。天国には緑の靴を捨てた可愛い天使が、そして地獄には緑のヒールの尻軽女と、そんなヒールなんか見たこともない善良な亭主どもがいっぱいいるのだから。

聞き手の予想を覆す展開の意外さ、言葉遊びや比喩の面白さ、ゴム手袋のような効果的なアイテム、皮肉の小気味良さ等が、曲使いによって一層際立たされ笑いを誘う。その笑いは女の子にとっては悲劇的な出来事を面白おかしい笑い話に変え、つまらないことには目をつぶって自分が今幸せになればいいのよという前向きなメッセージのために用いられている。ルメイの他の「爆笑もの」楽曲も、誰もが経験しそうな失敗やイライラを面白おかしく語って笑い飛ばすものである。このマイナスをプラスに変えるポジティブな効用がルメイの笑いを特徴付けている。

2.2 アナイス Anaïs[ix]

この人気絶頂のルメイのパロディによって一躍有名になったシンガーソングライターがいる。アナイスである。ケベック出身のルメイのカナダ仏語を真似て、同じようにギターを弾きながら歌うのは、ルメイを思わせるがよく聴いてみるとまるで出鱈目の歌なのである。《人生がフォアグラでも、鴨のムースでもないとしても、むしろお粥か蕪に似てるとしても[…]、何言ってんだかもう分かんないわ》（『人生がフォアグラじゃなくてもbyリンダ・モレイ』)。それがニセモノだと気付いた人を笑わせるのは、ルメイの歌詞の技巧性を露わにしてみせるからに他ならない[x]。これと対照的にアナイスは、洗練などお構いなしとばかりにストレートに感情を解放する。その姿勢は、彼女が自分のライヴにつけたタイトルThe Cheap Showにも通じる[xi]。

二人の対照は、共に「分娩の本人にしかわからないつらさ」というテーマを扱った『いい子ちゃん』（ルメイ）と『この世で一番美しいコト』（アナイス）を比べてみるとよく分かる。ルメイの方は、誕生日を迎えた幼い娘に語りかけるという形で、その子が生まれてきた日のことを周りの人の描写も交えて滑稽話に仕立て上げている。おろおろする父親、人ごとと思って楽しんでいる親戚、ゴルフに行ってポケベルが鳴っても気付かない担当医、「いきんで」とさえ言えない役立たずの当番医、ひとり落ち着き払った看護婦、そして《前線に出て行く兵士みたいに　毛を刈られるのが嫌な寒がりの羊みたいに震えてる》「私」。片やアナイスはといえば、羞恥心も何もかなぐり捨てて力の限りわめく。《だからいきんでるってば！　さっきからずっといきんでるじゃない！　もう赤ちゃんいらない　おうち帰ろうよ！[…]出てこいっての　殺すぞこのガキ！》

『ハニー、ダーリン』では、公衆の面前でいちゃつく男女に《ムカつく》《カップルなんて大っ嫌い》とシャウトする。《こてこてプリン》《センチメンタル盛合せ香草風味》など皮肉を込めた比喩も用いているが、手の込んだところはなく毒舌という方

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

が似つかわしい。２番では用もないのにケータイで電話しあっている様子を真似てみせるなど、その笑いはテクスト以上にパフォーマンスによって、そして毒舌のもたらすカタルシスによって生じているといえる。

2.3 ザジ Zazie[xii]

アナイスが慎みのないカップルに対して行ったように、何かを指差して笑い者にすれば懲罰的効果が生じる。ザジの『みんな』では人種差別発言を繰り返す政治家ジャン＝マリー・ルペンJean-Marie Le Penが槍玉にあげられているが、その手口はなかなか狡猾である。

歌詞は最初ただファーストネームの羅列のみが延々と続く。それらは二つずつ組になっていて、中にはフランス人にとってのガイジンの名前が沢山混じっている。計８組16人分の名前のあとに《みんなって素敵　みんなの世界って美しい》というフレーズ、再び同様の名前の羅列と繰り返しフレーズ、そのあとにQuitte à faire de la peine / A Jean-Marie（ジャン＝マリーには悪いけど）と歌われる。つまりルペンの嫌いなガイジンの名前をフランス人の名前とごた混ぜにして、彼のファーストネームに倣って二つ一組にする。そして、異なる民族同士が手をつなぎあうこんな世界は素晴らしい、ジャン＝マリーつまりルペンにとってはラペンla peine（つらい）でしょうけどね、と皮肉っているのである。

ザジはモデル出身の恵まれたルックスに加え、作詞作曲も自分でこなし、他の大物シンガーにも望まれて楽曲を提供するほどの才能で絶大な人気を誇るトップスターである。社会の問題に常に関心を寄せ、アイドルとしての影響力をためらわず活用してメッセージを発し続けている。その際、世の中に対する疑問や怒り、悲しみをそのままぶつけるのではなく、この歌のように暗示を込めたりユーモアにくるんだりして表現しており、それ故広く受け入れられているのであろう。

2.4 ヴォロ Volo[xiii]

ザジのようなアイドルも含め、多くのアーティストが社会的な問題を歌で取り上げているのは、日仏の大きく違う点であろう。その際ザジでみたように、ユーモアや哄笑は積極的に活用される。男性二人組のヴォロのレパートリーにも、ユーモアにくるんだ問題提起や異議申し立てがみられる。利益追求を奨励し、弱者切り捨てはアダム・スミスのせいにする社会を皮肉る『フランス経団連』などがなかなかシリアスなのに対して、「無賃乗車を見つかったけど車掌が素敵な女のコで…」と、当局による監視・取締りの横暴さをあてこする『イイ話』などは悪ふざけ的である。

ヴォロのスタイルは、身辺雑記からこうした社会的テーマに至るまでを漫談調に歌い語るというもので、笑わせることに積極的である。『ウサギ』ではデートの誘いにＯＫするくせに平気ですっぽかし、後で訊くとありとあらゆる言い訳を考え出す女の子たちの習性をぼやいている。駐車場が見つからなかった、電話番号をなくしたなど、最初はいかにもありそうだった言い訳がどんどん奇想天外になって、ホワイトハウスからの呼び出しやら内戦勃発まで出てくる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

それでも結局のところ言い訳の常套手段が「曜日を間違えた」であるということが、言い訳の列挙を３度「火（木、日）曜だと思ってた」というフレーズで締めくくることによって暗に示されている。そして最後には「それなら最初からノンと言ってくれよ」というオチがつく。こうした鋭い着眼点や語り口のうまさの見られる歌詞に加えて、その滑稽な内容と、アコースティックギターにのせてハモるという抒情フォーク的曲調とのギャップも、このデュオの笑いを増幅させているように思われる。

2.5 ベナバール Bénabar[xiv]

ヴォロに限らず、身辺に密着した事柄を歌うのは近年のシャンソンの傾向で、ベナバールもそんなアーティストのひとりである。先述したルメイの歌のあるものが、ダイエットや美容院、家の来客など、女の内輪話的であるとすれば、このベナバールには男の内輪話的なものがあって、好対照をなしている。例えば女の子と同居するようになり、不潔で乱雑で居心地がよかった部屋が小ぎれいに変わり果てたことを嘆く『うちに女が棲みついた』、愛する女性のため、小型車を運転するいい夫・いい父親に成り下がるであろう自分を皮肉な目で思い描く『ワンボックス』などである。

ベナバールがデビュー当初からユーモアによって注目された[xv]ことは、身の回りの観察における着眼点の面白さや描写の巧みさ、皮肉と優しさの同居した視線などから頷ける。それに加えて、笑わせることへの積極性も指摘することができる。以下にみるように、それはヴォロよりも一層戦略的で重層的である。

まずテクスト上の戦略として、例えば効果的なディテイルでいわば「笑いのツボ」を押さえること。『うちに女が棲みついた』では、部屋の変貌ぶりを象徴する小物として、同柄の枕カバーとシーツ、ハーブティーのティーバッグ、《石鹸じゃない石鹸》、野菜と果物で一杯の冷蔵庫等々、そして究極のアイテムとして観葉植物を持ってくるなど、巧みに選ばれている。《何だよこれ、うわー、観葉植物だ！》と大げさに驚いてみせたり、『子守唄』で眠ってくれない赤ん坊に向かって、寝たらケータイ買ってやる、ポニーにダイナマイトにカンガルーも、と取り引きを持ちかけ、エスカレートさせていくなどの誇張も、聞き手を笑わせる手法である。

『子守唄』のように起承転結をつけた語り方も戦略的である。まず冒頭で、もう何日も前から毎日何時間も、寝付かない赤ん坊相手の悪戦苦闘が続いていることを提示する。リフレインを挟んでその日の奮闘ぶりを、先述した取り引きに至るまで更に詳細に描く。その後、最後の手段として、寝なかったら抱っこやめるぞと脅すと事態は一転、赤ん坊はついに天使のようにすやすやと眠る。しかしパパはもう出勤の時間、そこで《仲直りの印に　ちょっとラッパを吹いてあげよう》。このようにオチをつける、というのも他の楽曲でも見られる。『うちに女が棲みついた』では最後に同居人の台詞が出てくる。《オーバーに騒ぐのはやめてよね　家賃はあなたと同額払ってるでしょ》。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

テクストだけでなく演唱でも、赤ん坊との格闘に疲れ果てた様子や、観葉植物を発見したときのショックなど、心身の状態を要所要所で再現してみせ、より面白く聞かせている。更に音楽アレンジの貢献もある。『子守唄』の真面目くさったバックコーラス、最後に聞こえる高らかなラッパの音などである。このように笑いは、言葉・音楽・パフォーマンスの全てにおいて仕掛けられているのである。

2.6 ヴァンサン・ドゥレルム Vincent Delerm[xvii]

ドゥレルムもまたベナバールと同じように、日常のことを一人称で語るシンガーソングライターである。語り口はベナバールがエネルギッシュで感情表現豊かなのと対照的に、淡々と抑えた調子で、内容もしっとりしたものが多いが、中には滑稽なもの、ユーモラスなものもある。『ファニー・アルダンと僕』では棚に飾った女優のポートレイトと「僕」との「共同生活」を歌う。二人の間では「僕」は大学の女の子の話題を、彼女はドパルデューの話題を避け、僕が夜遊びをしている時、彼女は《壁紙をじっと眺めている》。そして《僕の帰りが遅すぎる》とそれを《咎めるような目をする》のである。また『裏表紙』は古本市の店先でよくある出来事がテーマである。本を物色中、ひとつの女性の手が視界に入ってくる。その手が選びとる本から、顔も見ないその人についての想像がとめどなく膨らむ。《フェリーニのストーリー・ボード　そういうの読んであなたは夜更かしするんだ》《僕のことどう思う　もし『プラティーニ[xvii]の時代』を手に取ったりしたら》。

ただその笑いはベナバールなどのように意図されたものというより[xviii]、自然と滲み出てくるものであるように思われる。或いはそれこそドゥレルムの意図なのかもしれない。『コスモポリタン』で「僕」は別れた恋人が部屋に残していった唯一のものである女性誌に読み耽っている。《夕暮れ時　ハーブティーの冷めるまま》《ケーキの食べかすをこぼしつつ》星占いや同世代女性の声に目を通し、アンケートや診断テストへの書き込みに心の中でコメントしている。《理想の父親　ジャン・レノ［…］　君とは思えない》。その姿はどこか滑稽で、それが不在の悲しみや、取り返せない時間に対する後悔といった、しみじみした感情に彩りを添えている。このいわば「そこはかとないおかしみ」とでも表現したくなるようなものがドゥレルムの笑いである。

2.7 トマ・フェルセン Thomas Fersen[xix]

日常の現実的な世界から逸脱した、ありえないような世界を構築してしまうという点で、トマ・フェルセンはこれまで述べてきたアーティストたちの多くと異なっている。彼も初期の楽曲では日常の出来事を歌っていたのだが、徐々に非現実的で突飛な世界へとシフトしてきた。しかしその内容以前に、このアーティストがサウンド的に、更にはビジュアル的に、既に独特でユーモラスな雰囲気を作り出していることに触れておきたい。

まず視覚面であるが、彼のアルバムジャケット写真は２作目以降順に、肩の上にウサギ、背広の胸ポケットに魚、自分の頭部

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

の代わりにウクレレのケース、膝の上に豚の頭、自身の顔のアップに片目だけ付け睫毛、といずれも奇抜である。リーフレットの中身の写真もそれ以上に奇抜で、3作目ではネクタイ代わりに魚をワイシャツの襟元からぶら下げた半身像などが出てくる[xx]。

一方聴覚面では、まず彼の声自体がひどくしゃがれている。しゃがれ声には粗暴な印象からくるカッコよさもあるが、フェルセンの歌い方はロック歌手のように力を入れないので、そのざらついた感触だけが耳につく。しかもこの声に対して弦楽器・木管楽器による室内合奏曲風のアレンジを頻繁に用いており、奇妙なコントラストを成している。またウクレレやバンジョーという、シャンソンでは珍しい楽器を使った曲もあり、このときは声と相まって一層軽妙な味わいになる。

歌詞に論を戻すと、フェルセンの歌のおかしみはまず、その突飛さそのものからくる。女が囚人に差入れる、脱獄用の道具を忍ばせた料理の数々、蝙蝠と傘のラブストーリー[xxi]。取り上げるテーマ自体も異例である。足の臭いやお腹の鳴る音、潰したニキビのこと[xxii]を歌う歌手など、彼をおいてめったにいないだろう。

次にテクストの言語レベルでの巧妙さがある。『長靴をはいた猫』の主人公である靴屋の店員は、ある日ひとりの女性客にすっかり魅了される。日々悩まされている客の足の臭いさえ、彼女に限っては《瓶に詰めてとっておきたい》。そして蛇革のミュールを所望するその娘に《ブーツを勧める proposer la botteなどという突飛で馬鹿げた考え》を抱く。ここではproposer la botteという言い回しが巧く使われている。これは「女性に性交渉を持ち掛ける」という意味の、決まった言い回しなのである。『聖人君子の僕だけど』では、堅物の自分に隠された一面をj'ai un côté malsain / Donnant sur la rueと表している。直訳すると「僕には通りに面した不健全な側面がある」ということだが、人物の「側面」という比喩的な意味で使われるcôtéを本来の「(物体の)面」の意味に戻して、それを「通りに面した」と繋げることによって、街をぶらつく遊び人のイメージを引き出している。

『晴れの日のデコレーションケーキ』では脚韻に遊びの楽しさがある。牢屋へ差し入れるブリオッシュの中に隠されているのはツルハシpioche［ピオッシュ］、約environ［アンヴィロン］10mの縄は栗marron［マロン］添えの七面鳥の中に。ではmortadelle［モルタデル］ソーセージとくれば、聴き手は［エル］で終わる語を待ち受ける。仕込まれているのはシャベルpelle［ペル］である。

突飛な着想、言語的な技巧に加えて、その突飛な世界で展開する人間の行動や心理の真実らしさも、笑いを深いものにしている。女性客が試着したミュールの残り香を後生大事に嗅ぎ続けるなど、あり得ない話だが、恋をすれば足の臭いさえ妙なる芳香となり、もう二度と会えない人の僅かに残された痕跡が毎日の喜びとなる、というのは成る程そうだと思わされる。誇張されてはいるが、人間の持つ人間らしい一面を巧みに突いているので、聞き手は笑いながら

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

も共感してしまうのである。

3．結び

このように「笑い」は現在のシャンソンにおいて積極的に取り入れられている。本稿で取り上げたのはそのごく一部に過ぎない。

ここでは歌詞中心に見たが、言葉や語り口に笑いを引き起こす仕掛けがあることや、それを基盤としながら、音楽やパフォーマンスによって笑いが新たに付け加えられたり、言葉との相乗効果を発生させたりしていることも示せたものと思う。

また「笑い」といってもそこに様々な要素があった。自分自身を笑うものもあれば何か別のものを指差すものもある。ただ笑わせることを目的としたものもあれば、懲罰的効果を狙ったもの、不幸を笑いに変えるものもある。笑いの性質もしみじみとしたもの、あけっぴろげなもの、知的遊戯を伴うもの、皮肉なものなど多様である。

これほど多くの多様な笑いが存在しているというのは、世界規模で流通している英米発のポップスや、身近な日本の流行歌と比べてどうなのだろうか。もしかしたらこの「笑い」こそがシャンソン＝フランスのポピュラーソングの特徴ではないかとさえ思いたくなるが、安易な印象による即断は避けるべきであろう。むしろ「笑い」という切り口で普段何気なく耳にしている歌を改めて見直すことで、思いがけない発見ができるのではないか、ということを提案したい。

（といた　りつこ）

注

i　拙論「シャンソンにおける「笑い」の実践ーシャンソン・プリュス・ビフリュオレの事例ー」『笑い学研究』第13号　日本笑い学会　2006　pp. 29-38

ii　わが国でもよく知られたアーティストの中では、例えば70年代のスーパーアイドル、ミシェル・ポルナレフMichel Polnareffは、中性的なファルセット・ボイスに長髪、フリルの衣装というルックスで、ホモ疑惑に付きまとわれていたのだが、『僕は男なんだよ』*Je suis un homme*［詞・曲M. Polnareff］という歌で《そんなの信じる女性は試してみたらいいのさ》とやり返している。

iii　1990年代後半からのシャンソン界の状況を概観した記事として*Chorus*　50号　pp. 84-85［“*Génération Chorus*”, F. Hidalgo, Verbe, 2004］及び57号　p. 135［“*Carnet de notes*”, J-M. Boris, id., 2006］など。

iv　66年、フランス語圏カナダのケベック生。大学時代から本格的に歌作りに取り組み、89年のグランビーGranby音楽祭で最優秀シンガーソングライター賞を受賞。フランスでは90年以降数々の音楽祭に参加、ツアーも行う。フランス最大の音楽賞Victoires de la musiqueで02年度最優秀女性シンガー賞を獲得。07年リリースの*Ma signature*が通算10枚目のオリジナルアルバムとなる。

v　タイトルは順に*Chaque fois que le train passe, Paul-Emile a des fleurs, Roule-moi*

vi　順に*Epoustouflante, Monsieur Marchand, La cassette vidéo, La visite*

vii　順に*La lune et le miel, La marmaille, Pourquoi tu restes?, Bande de degonflés*

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

viii 楽譜は*Les souliers verts*, Ed. Raoul Breton参照。

ix 本名Anaïs Croze。ロックグループで４年間活動後、ソロ転向。06年度Victoires de la musique最優秀女性新人賞にノミネート。

x 『緑色の靴』で靴の出現を茸や天の奇跡に喩えていたが、ルメイには飛躍的な連想や比喩表現が多い。

xi このタイトルで06年にリリースされたライヴアルバムが彼女のＣＤデビューとなった。

xii 64年生。大学で運動療法を学んだ後、19～26歳までモデル業。92年にアルバムデビュー。Victoires de la musiqueでは92年度最優秀女性新人賞、96年度最優秀クリップ賞、97年度及び01年度最優秀女性アーティスト賞獲得。07年リリースの*Totem*が６枚目のオリジナルアルバムとなる。エイズ患者を親に持つ子を支援するSol en siなど社会活動にも積極的に参加。

xiii 01年結成の兄弟ユニット。兄フレドFrédoは国立高等演劇学校に学び、ユーモア系音楽グループ、レ・リグルスLes Wrigglesメンバーとして95年以来舞台活動。弟のオリヴィエOlivierは哲学修士で教員免状取得を目指していた。07年に２枚目のスタジオ録音アルバム*Jour heureux*をリリース。

xiv 69年生。映画の道を目指し短編映画を発表して賞も獲得するが、音楽に転向。デュオ、グループでの活動とアルバム発表の後、ソロに。プラチナディスクとなった03年リリースの３rdアルバムでVictoires de la musique最優秀アルバム賞獲得、また06年度最優秀男性アーティストにも輝いている。

xv ２ndアルバムのレビューを掲載した*Chorus* 37号［id., 2001, p.37］は、彼を《自己戯画化とユーモア、そして何よりも優しさあふれるポートレイトをとおして日常を物語る味わい深い語り手》と紹介している。

xvi 76年生。大学で現代文学を学んだ後、98年にソロ・シンガーとして初舞台。後述するトマ・フェルセンと出会い、ライヴに前座として出演するなどし、人気を得ていく。07年リリースの*Les piqûres d'araignée*が通算３枚目のオリジナルアルバム。父親はベストセラー作家のフィリップ・ドゥレルムPhilippe Delerm。

xvii サッカーの名選手。日本なら『長嶋茂雄の時代』とでもなるだろうか。

xviii 笑いを狙った楽曲も彼のレパートリーにないわけではない。***Na na na***［詞・曲V. Delerm］はうんざりするような質問に悩まされた取材かインタビューを振り返って、苦心して下手な答えをするよりna na na na...と鼻歌でも歌っておいた方がマシだったと歌う、自嘲とマスコミへの皮肉が込められた内容。

xix 63年生、本名Pierre Etaix。アーティストネームの由来は、メキシコ人サッカー選手Thomas Boydとマリー・アントワネットの愛人Fersen伯爵から。80年代にパンク系ロックバンドで活動後、87年にインディー系レーベルTôt ou tardの設立者ヴァンサン・フレルヴォVincent Frèreveauと出会い、１年後にソロ・デビュー。94年度Victoires de la musique最優秀男性新人賞獲得。05年リリースの*Le pavillon des fous*が通算６枚目のオリジナル・アルバム。

xx それぞれ各アルバムの収録曲やテーマと

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

何か関係している。例えば３枚目はアルバムタイトルが『魚の日*Le jour du poisson*』。

xxi　順に*Pièce montée des grands jours, La chauve-souris*

xxii　順に*Le Chat Botté, Borborygmes, Le bouton*

＜楽曲データ＞＊：収録アルバム。別記のアルバムリストに対応。

邦題	原題	作詞／作曲	＊
いい子ちゃん	Ma chouette	L. Lemay	10
イイ話	Histoire sympa	F.Volovitch	11
ウサギ	Les lapins	F.Volovitch	11
うちに女が棲みついた	Y'a une fille qu'habite chez moi	Bénabar	2
裏表紙	Quatrième de couverture	V.Delerm	6
コスモポリタン	Cosmopolitan	V.Delerm	5
この世で一番美しいコト	La plus belle chose au monde	Anaïs Croze	1
子守唄	La berceuse	Bénabar	4
人生がフォアグラじゃなくても byリンダ・モレイ	Même si la vie n'est pas du foie gras... par Linda Molay	Anaïs Croze	1
聖人君子の僕だけど	Moi qui me croyais un saint	Fersen/J.Racaille-Fersen	7
長靴をはいた猫	Le Chat Botté	Fersen	8
ハニー、ダーリン	Mon cœur, mon amour	Anaïs Croze	1
晴れの日のデコレーションケーキ	Pièce montée des grands jours	T. Fersen	8
ファニー・アルダンと僕	Fanny Ardant et moi	V.Delerm	5
フランス経団連	Le MEDEF	O.Volovitch-S.Paquet/O.Volovitch	11
緑色の靴	Les souliers verts	L.Lemay	10
みんな	Tout le monde	Zazie	12
ワンボックス	Monospace	Bénabar	3

＜アルバムリスト＞

＊	アーティスト	年	タイトル	発売元等
1	Anaïs	06	The cheap show	V2 Music VVR1046272
2	Bénabar	01	Bénabar	Zomba Records France 82876535612
3	Bénabar	03	Les risques du métier	Zomba Records France 82876526282
4	Bénabar	05	Reprise des négociations	Sony BMG 82876729942
5	Delerm	02	Vincent Delerm	Tôt ou tard 834510503
6	Delerm	04	Kensington Square	Tôt ou tard 834510252
7	Fersen	97	Le jours du poisson	Tôt ou tard 0630187512
8	Fersen	03	Pièce montée des grands jours	Tôt ou tard 0927499692
9	Lemay	98	Lynda Lemay	WEA France 3984-21 608
10	Lemay	99	Live	Warner Canada 3984-26387-2
11	Volo	06	Blancs Manteaux à Volo	Opera-music OPM3255
12	Zazie	98	Made in love	Mercury 5580802

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Laughter and Humour Studies (JSLHS)

プロフィール

フランス語非常勤講師（広島大学他）。日本ポピュラー音楽学会、日本フランス語フランス文学会中国四国支部会員。学術修士。三重県出身、広島市在住。フランスのポピュラーソング（シャンソン）に「芝居」「語り」「詩」「社会参加」「笑い」といった局面から切り込み、歌という表現ジャンルにおいて言葉が他の要素（音楽、パフォーマンス）とかかわりあいながら機能する様の分析・記述に取り組んでいる。

NII-Electronic Library Service